

〈研究ノート〉

「教育を支えるもの」についての一考察

—時・所・人を得て—

Consideration on the foundation of education: time, place, and relationship

寺内孝夫

Takao TERAUCHI

概要

教壇に立ち40年余りになる。1984年（昭和59年度）内地留学で一年間ご指導いただいた真仁田 昭先生（まにた・あきら＝教育心理学者、筑波大学名誉教授）が2018年（平成30年）12月に91歳で他界された。教育現場で様々な壁に直面するたび支えとなっていた先生からの教えを大切にしながら、今も学生たちと向き合っている自分がある。新型コロナウイルス感染症と誰もが向き合わなければならない時代にあって、先生のご逝去が私に教育の原点について省察の機会を与えてくださった。教育という営みの中で、我々が見失ってはならない大切なこととは何であるかを内地留学時の思い出や成果、その後の一教師としての取組を基に恩師のお力を得ながら考察する。

キーワード：ふれあい、時間、空間、疲れ、希望

1 はじめに

学校は昨年2月末の新型コロナウイルスの感染拡大にともなう休校措置の影響により、学習の遅れを取り戻すべく、授業時間の確保が最も優先される場所になっている。運動会や修学旅行などの学校行事や学級活動が削られるどころか、感染症対策のため、子ども同士で遊ぶなどの、関わり合いが制限されている。食事の際も話をせずに静かに食事が当たり前になってしまった。

コロナ禍の中、全国の大学では否応なしに双方向型のオンライン授業が導入された。国公私立大学、短期大学、高等専門学校のうち、緊急事態宣言が全国で解除された後の6月1日時点で全面的に対面授業をしているのは約1割だったと、文部科学省が発表した。

握手をする、手を取り合う、抱きしめる、ハイタッチで喜びを分かち合う、肩に手をやってその悲しみを癒やす……。親しさを表す方法は、表情や言葉などたくさんあるが、握手に代表される「ふれあい」を、なぜ私たちは行うのだろうか。「ふれあい」は、情動に大きな影響を及ぼすと考えられる。特に、コロナ禍の子どもたちには、ふれられないことの影響が大きいのではないかと懸念する。

コロナの感染拡大により加速した「ふれあい」のない社会は、子どもたちのみならず、

私たち大人の心にもどのような影響を及ぼすのだろうか。それとも単なる杞憂に終わるのだろうか。

2 1970～80年代の教育現場（3離4走）

1978年（昭和53年）4月、高校の教師となった私はそれ以来、今日に至るまで多くの若者と接してきた。その中で教師に成り立ての頃を振り返ってみると、親、教師、地域社会の人々から心が離れ（3離）、性・車・薬・盗みなどに走ろうとする（4走）生徒達との格闘に追われる毎日であった。

非行、不登校（当時は登校拒否と一般的に呼ばれていた）、自殺、いじめなどの問題の原因には様々なものが挙げられるが、その重要な要因の一つとして、自然や文化とのふれあい、人と人とのふれあいの希薄化を挙げねばならないだろう。3離4走の子どもたちには、成長過程に不可欠のはずの「人」とふれあい、「時」や「場」を共にすることをいとう心理があるように見える。私も学校現場で不登校など様々な問題を抱える多くの生徒達と接してきたが、接すれば接するほど人間関係の歪みの中から生じたものであることを痛感させられた。しかし、その生徒達も、様々な活動中における動きの端々から、心を開いてふれあいを求め、そのふれあいの中で再び心新たに生き生きと現実に対応しようとして試行錯誤を繰り返している姿を肌で感じるが多々あった。

生徒の問題行動に対して、対症療法的な対策を立てるだけでは真の問題解決にはならない。そこで、生徒理解の在り方を「ふれあい」という観点から改めてとらえ、そして、教師と生徒が時を分かち合って共に生きることに魅力を感じるために、我々教師が考えねばならないことは何か、といことについて考察する。

3 心の安定感とは何か

A.H.マズローは、人間の基本的欲求とその階層的配列について、「基本的欲求には、生理的欲求、安全性の欲求、所属・愛情の欲求、承認・尊敬を求める欲求、そして自己実現への欲求とあり、これらは強さや優位性の順に、階層的、発達のなかたちをとって相互に関係しあい、また、すべての基本的欲求は、それを包む一般的自己実現への途上の単なる階梯である」と述べていることは、よく知られている。

安定感のある状態は、豊かな人間性というときの「豊かさ」の中に充実感のある状態、感受性に富んでいる状態と共に含まれてくるが、それは所属・愛情の欲求と承認・尊敬を求める欲求という両方の欲求が充足されているときにもたらされるのであろう。

教師は生徒に対して、つい、心ない言動をとりやすく、それを生徒がどう感じ、どう思っているかなどには、ときに無頓着となる。人間に対する敬意と思いやりをもって互いに接するとき人間関係は安定し、その中で己の課題とするものに人は向かっていくことができるのである。古人のいう「人は知己を得て初めてその力を振るうことができる」

のである。

4 「ふれあい」とは何か

コロナ禍の現在、私たちの考えるべき重要項目の一つは「ふれる」であり、密を避けるということは「ふれない」社会を作ることであって、そのコミュニケーション不全は後々世界全体に悪影響を及ぼすと言ったら言い過ぎだろうか。

そもそも「ふれあい」という言葉は、手元の国語辞典を繰ってみてもみつからない。だが、「ふれあい」は「触れ合い」であり、相互性を表していると考えられる。触れるという言葉は、現代の日常用語では主として「さわる」の意味で使用されることが多く、もし、ふれあいをこの意味で解すれば、ふれあいはまさに「さわりのあい」になってしまい、不自然である。坂部恵は、「さわる」と「ふれる」の日本語の区別について、著書『「ふれる」ことの哲学』等の中で、「「さわる」は、「寒さがからだにさわる」というときのように、「秋風が快く私のはだにふれる」などというのとは違い、主体と客体の区別も明確でなく、いくなれば、惰性化した日常の境域の侵犯であり、能動—受動、内—外、自—他の区別を超えた原初の経験である」と述べている。肌と肌、手と手、体と体が触れるという身体接触は、「ふれあい」の意味する一つの内容だが、触れるという言葉のもう一つの使い方を真仁田は、「狂うという意の「たぶる」（狂れるの意）は除くが、伝達する・知らせる・告示するという意味の触れるであり、「触れる」はまた「布令る」とも書かれる」と述べている。

このように「ふれあい」は複雑な意味を持つ言葉であるが、人との「ふれあい」とは、人と人との互いに接触しあい、そこで互いの意志や感情などを伝えあい、それを共有することにより、他人同士が結びつく様を表しているといえるだろう。しかし、こうしたふれあいがそう簡単に成立するはずはない。今日の心を閉ざしがちな子どもたち、生徒たちとの間にふれあう関係をつくるにはどうしたらよいか。このことについて、次に「空間」と「時間」という二つの観点から考察してみる。

5 ふれあいを可能とする「空間」について

空間の問題では、真仁田は、人が「自分の生に転機を求め、心新たに生き直そう」とするには三つの空間が必要であると指摘する。一つ目が外界と隔てられた仕切り空間・こもり空間（個室、面接室）、二つ目が多くの人と心身を躍動させながら交流することのできる広やかな空間（広場や原っぱなど）、そして三つ目が逍遙空間（道草空間、散歩空間など）である。自然や文化とのふれあいも人とのふれあいを深めるのに大切なものだが、教育相談ではふれあいを期待する場として面接室や遊戯室（プレイルーム）が普通使用される。その空間は、いわばその瞬間において一期一会の意味をもつ場である。仕切られた空間の代表は家屋であるが、O.F.ボルノウは、家屋は人間に安らぎを提供して

くれると言い、真仁田は仕切られた空間の持つ意味について、「それは、人が心新たな生き直しを図る時の一つの大切な場になる。そこで安らぎと張りをもった生活をする所から、再び生きる意味をもつことができる」と述べている。したがって、面接室というのは、心の安定が得られ、張りがもてるような空間となることが必要であり、それはまた面接室に限ったことでなく、家庭や学校がそうした空間とならねばならぬだろう。子どもたちの成長にとっても、この三つの空間にバランスよく身を置くことが重要なことであろう。

面接室でのふれあいの他に、広やかな空間でのふれあいも考えられる。共に存分に身体を動かし、様々な活動（運動）を通して、より安らぎと張りを感じ、その中で自ずと対話が可能となる場合も多い。広場を「救いの場」として用いたのは踊り念仏で知られる一遍上人であるが、彼は人と人が存分につながりの中で我を忘れた一時を広場で持つ時に人は救われるのだと考えたのである。さらに、時間と目標から解放された散歩空間（逍遙空間）がある。互いに肩を並べて言葉を交わしながら、その道々を楽しむことが、ふれあい空間として大きな意味をもつだろう。豊かな感受性は、ゆとりや散策によりよみがえり、深められることが多いが、絶えず急がされている今日の我々の生活や教育を顧みるに、これら三つの空間のもつ意味を改めてとらえ直してみる必要があるのではなかろうか。

6 ふれあいを可能とする「時間」について

学校と「時間」の関係をみると、たとえば、学校では1時限の授業単位が45分とか50分に設定され、授業空間が存在する。また、一日、一週間、一学期、一年という時間の枠組みで教育活動が展開され、その先に進級や卒業がある。このように、学校教育は「時間」の枠の中で守られ、「空間」が保証されている「場所」と考えられる。

人は時の流れの中に節目を設け、その節目を、事をなすに際しての出発点とし、また事を仕上げる目標の時点とする。学期の始めとか月曜日とか、文化として設けられている節目が子どもたちの生活の転機となるし、自分自身で時間に区切りを設けることで、自分の行動を規定しようとする。経験上、生徒の中で、心理的に問題を起こしやすい者は、節目や区切りへの対し方に問題のあることが多いと考える。「時間」や「時の節目」の持つ意味の重要性を真仁田は、「それは人をして何かある方向に誘う力をもつ。不登校の子どもは、4月、5月の連休後、9月、1月、月曜日、学校行事の前後など変化を求められる節目に大変弱い。だが、そういう子どもたちが自分を立て直すきっかけをつかむのもまさにそういった節目からなのである」と指摘している。そう考えると、一種の危機あるいは転機といえる節目、心新たな生き直しのために節目を生かすことが、相談活動にとっても、また教育にとっても大切なことだろう。面接における時の節目、すなわち「来週の今日この時間に会おう」という約束はそれを互いに守りあうこと自体が創造的な

営みであり、またそこでの時間体験において「アッという間に時間が過ぎ去った」と感じるとき人は充実感を味わうのである。それを真仁田は「瞬く間体験の共有」と表現し、その共有にこそ相談の進展があるという。その体験は日常の時間を越えて瞬間の中に生きることであり、相談活動の展開においては、時間の経過を忘れるような両者の思いの共有の有無が重大な観点となる。

また、「瞬く間体験」の感覚、今の「時を忘れて」という充実感のある生活は、更に次の生活に対する明るさ、希望へとつながる。自分の努力が、そして自分を取り巻く人たちの温かさが、将来の明るさを自分にもたらしに違いないという確信をもたらし役割を果たしてくれるのである。そのことは、その子が身を置く学校生活においても、その活動が退屈で集中することができず、「やっと終わった」と思うのではなく、その時間が「もう終わったのか」と瞬く間に経過したと感ずるような時間、活動を提供できるかどうかということが重要な課題となることを意味する。

7 「間」について

「3密」（密閉、密集、密接）の回避、「ソーシャルディスタンス」（社会的距離）、「アフターコロナ」、マスクや手洗いは「新しい生活様式」として浸透。現在、コロナ禍にあって我々がとらされるもの、とらなければならないものになっている「距離＝間」。ただの空白ではなく、充実した、緊張感のある、時間的・空間的な距離。日本の茶道や能楽も、間をとる作法で独自の美を育んできた。

人と人における「間」の問題は、三つの観点から考えられる。一つ目は心理的な「間」であり、相手に対する心理的距離の取り方や持ち方である。真仁田によれば、共感とは「やじろべえ」のようであり、互いの心理的距離の取り方によって、左右に大きく揺れやすいものだという。ほどよい「間」を取るのとはなかなか至難の業ではある。二つ目は、時間の「間」の取り方である。これを文章で表現するのは大変難しいことである。声の間合いやトーン、相づちの打ち方や言葉のかけ方などはなかなか学ぶことができない。これは、稽古等を通して習得するしかないものだと言える。このことに関して真仁田は「教育相談活動には、科学的、芸術的、宗教的の三つの側面があるといえる。科学的とは断固として真実を追究する姿勢、芸術的とは「間」の取り方、宗教的とは祈りと「同行二人」の心、ともいえるか。その「間」、この活動領域では、「聴き、そして言葉をかける間」が核となろう。その「間」の習得、やはり稽古の積み重ねによるしかない。そこに、この「活動」の奥行き、そして面白さも難しさもあると思っている」と述べている。三つ目は、空間的な「間」の取り方である。相手とどのような位置関係や空間で接するのかということである。その人との関わりを位置的に捉えれば、正面から相対し話をしてくれる人、旅の道連れのように肩を並べて一緒に歩んでくれる人、背後にあって付き従ったり見守ってくれる人、そして先頭に立って歩んでくれる人、などであろう。このような様々な位

置をとれる人々のあることが子どもの成長にとっては必要なのである。

なお、空間の問題では、真仁田は、人が「心新たに生きなおそう」とするには三つの空間が必要であると指摘していることは前述したとおりである。

8 「疲れ」と希望について

昨年の2月末、臨時休校から始まったコロナ禍で学校現場は様々な対策に追われた。「授業の遅れを取り戻す」ために各地でみられた夏休みの削減。しかし、休み中であっても多くの教員は出勤している。十分に休めた人は果たしてどれくらいいただろうか。

現代社会は効率の良さやスピードの早さが重視されがちである。一定時間内により多くの課題が処理でき、一つのことをより短時間に仕上げられる。その能力が他者よりも優れているかどうかで人は評価される。そのことは教育活動においても然りで、「より早く」が主流といってよいだろう。かつて昭和50年代の前半、子どもの自殺の若年化が社会的注目を集めた頃、中学生・高校生の遺書を真仁田研究室で集めたことがある。内地留学がスタートしたばかりの私だったが、時間をかけてそれらの遺書を読ませてもらった。そして、遺書のなかに「疲れた」という言葉の多いことに驚かされた記憶がある。さらには、この他に出てくる表現として、「ついていけない」とか、「もう駄目だ」という言葉であった。そのことは、「疲れ」が自己無力感や将来への暗澹たる思いと深く関連することを示唆する。

教育は、どの子どもにもより良い成長と変化を求める心があるとの前提に立つと私は考える。学校においてならば、教師や友だちそして学習と十分な関わりを持って自分の良さや持ち味を発揮しながら、より良く成長したり、変化していきたいとする心が必ず宿っているということである。そして、そのような欲求が生じ現実の動きとなるのは、その成長や変化がその先に予想されるときである。将来の明るさが信じられること、それこそがその子の活動を支える重要な要因となるに違いない。学校生活において様々な問題を抱える生徒たちは、自己努力や他力が必ずしも明るい将来をもたらすとは捉えていないことが多い。

もしも、誰かから、「結局のところ、教育活動を基本において支えるものは何か」と問われたならば何と応えるだろうか。40年余りの教師生活を振り返ってみると、教育という活動には失望や落胆の思いを繰り返し味わうところがある。しかし、そうではあっても心を新たにして教師としての務めを果たしてこられたのは、生徒たち、若者のやがての変化、今後の成長への信頼があったからと考えている。その信頼を別な言葉で呼ぶならば、それは「希望」であろう。その「希望」についてE・フロムは、人間性というものを特徴づけるのに、「ホモ・エスペランス—希望する人—」と述べている。人間は「希望」あってこそ生きられる存在とするのである。子どもたち、若者たちが努力に伴う明るさを信じて前向きに生きていくことができるか否か、それを左右する大きな条件は大人た

ちの子どもに対する信頼の深さではなからうか。

9 その後の私と人権教育

内地留学を終え、学校現場に戻って7年後、栃木県教育委員会事務局に異動となった。事務局に13年間勤務した内の10年間担当したのが人権教育であった。人権に関する仕事をしていくうえで、内地留学時に学んだ様々な理論と実践が大いに役だったことは幸せなことであった。その後、管理職として学校に戻り、定年退職するまでの10年間、折々に生徒達に向けて話してきたことがある。たまたま、県教委から「若手教職員に是非伝えておきたいこと」についての執筆依頼があり、それをまとめた冊子『先輩教師からのメッセージⅡ』（平成27年3月発行）のなかの拙文を一部抜粋し、ここに紹介させていただく。

〔(省略) 今日、子どもたちの間の陰湿な「いじめ」はより複雑化し、教師による体罰もなくなる。また、近年、親の子に対する虐待が増加し深刻な社会問題となっている。

こうした状況の中、教師の日頃の言動は、生徒の心に、時に漠然としてではあるが、その教師の人権感覚や価値観を伝えているものである。保護者も、教師の言動には大変敏感である。教育に携わる者としての教師には、常に人権に配慮した言動が強く求められていることを肝に銘ずる必要がある。

在職中「人権教育」に関しては次のような考え、信条を胸中においてきた。皆さんの実践や日常生活を振り返っていただくヒントにつながれば幸いである。

① 身の回りの社会で起きている人権に関する諸問題を感じ取ること

現代社会の現状・変化への敏感さが、教師の言葉の端々や仕草等に表れ、教師の人権感覚、価値観として、生徒たちに伝わっているのである。

② 偏見や差別の実態を知る努力をすること

生徒・保護者を取り巻く社会に目を向け、そこで起きている人権問題の現実を知ること、教師としての指導力・資質を高める。

③ 人権を尊重する教育の推進は、教師としての責務であること

生徒たちの人権感覚・人権意識を培うことは、教師の大切な職務の一つである。

特に、在職した最後の2年間、始業式や終業式における式辞などの最後に私が必ず生徒たちに話した内容は「命（自他の）を大切にすること」と「自分の心は自分で耕すこと」であった。そこには、授かった命を大切に、自他の人格を尊重し、他者を思いやる心など、豊かな人間性を生徒たちに培って欲しいという願いを込めた。そのためには、ボランティア活動などの社会体験や自然とのふれあい、様々な人々との交流、読書や芸術に親しむ機会をたくさん持とうと説いた。「心を耕す」ことについては、心を田んぼになぞらえ、「心が渴かないようにすること」が生きていくうえで大切なことであり、自分の心を耕すことが自己形成であり、「命を大切にすること」に繋がると繰り返し話したものである。(以下省略)

目を今のコロナ禍に転じてみると、新型コロナウイルスの感染者への中傷、偏見や差別的な言動が続いている。危険と隣り合わせで患者の治療にあたっている医療従事者を、周囲から排除する動きや風評被害も後を絶たない。コロナの時代に我々はどう向き合うのか、一人ひとりが問われている。

10 終わりに

今回のコロナ禍は、教育の面でも我々にいろいろなことを考えさせる機会となった。「授業の遅れを取り戻す」と各地の小・中学校であった夏休みの削減。昨春の臨時休校から始まったコロナ禍により学校現場では様々な対策に迫られた。これまでの仕組み、当たり前と思ってきたことの限界に気付かされたりもした。9月入学の議論や大学でのオンライン授業の活用拡大もそうである。これまで大教室で行っていた知識を得るような授業はオンラインで行い、少人数の対面授業で学生と教師が議論し深掘りしていく。そうすれば、思考力、判断力、表現力がより養われ、学びの「場＝空間」や「時間」の自由度も大きくなるのでは、と思ったりもする。一方で、多様な学生が集まり、互いに影響し合うキャンパスという「場＝空間」の意味が失われることがなきよう我々は努めていかなければならない。

2020年に自殺した児童生徒の数が前年比で約4割増の479人（暫定値）に上り、過去最多だったことが文部科学省のまとめで分かった（2021年2月16日付朝日新聞より）。それによると、小中高校生のいずれも増え、特に女子高校生は138人と倍増、コロナ下の長期休校が明けた6月や8月が多かった。479人のうち小学生は14人（前年比8人増）で、中学生136人（同40人増）、高校生329人（同92人増）だった。高校生は男子が191人（同21人増）で、女子は138人（同71人増）だった。原因は進路に関する悩み（55人）、学業不振（52人）の二つが例年同様に多数を占めると報じている。

この機会に「時間」と「空間」を観点として「ふれあい」について主に考察した。この間、教員に直接質問したり、学生同士で話したりして、場所と時間を共有することがどれだけ重要なことであるか再認識した。そして今、改めて思うのは、人間関係の中で心の安らぎと張りを感じることができるような指導が教師としての大きな課題ではなかろうか、ということである。よき理解者を得て問題解決への意欲を高めることができるのなら、教師は生徒との関わりにおいて、彼らの心にじっと耳を傾け、その心をより深く理解しようとする姿を確立することが必要だろう。すべての指導は、このことを前提として出発すると考える。

引用・参考文献

- (1) O.F.ボルノウ著、森昭・岡田渥美訳『教育を支えるもの』黎明書房、1982年
- (2) 坂部 恵著『「ふれる」ことの哲学』岩波書店、1984年
- (3) E・フロム著、作田啓一・佐野哲郎訳『希望の革命』東京創元社、1984年
- (4) 内地留学報告書（昭和59年度）栃木県教育委員会高校教育課 1985年
- (5) 真仁田昭編著『学校カウンセラーその方法と実践』金子書房、1990年
- (6) 『児童心理』2007年12月号臨時増刊、金子書房
- (7) 『先輩教師からのメッセージⅡ』栃木県総合教育センター、2015年